

NATURE AND NURTURE
AN INTRODUCTION TO HUMAN BEHAVIORAL GENETICS

Robert Plomin

(和文題名：遺伝と環境＝人間行動遺伝学入門，安藤寿康，大木秀一 訳，
培風館，1994，160 頁，2,266 円 (税込))

行動遺伝学という学問がある。本書はその手引き書である。あまり馴染みのないこの学問は、いったい何を研究する学問だろうか。

誰でも知っているように、子どもの性格や行動は、多かれ少なかれ親に似ることが多い。このような現象はどうして起こるのだろうか。親から受け継いだ遺伝のためなのだろうか、それとも子供が育った環境がそうさせるのだろうか。

人々にとって無関心でいられないこの問題は、長い間人々を悩ませてきた問題であった。昔からいうように、瓜の蔓には茄子はならないのだろうか。それとも本当に、鳶が鷹を生むことがあるのだろうか。

行動遺伝学という学問の出発点には、この氏か育ちか、遺伝か環境かという疑問があった。このような疑問は、やがて nature or nurture 遺伝か環境の学問的論争に発展する。子供は生まれてこのかた、いつも親の影響を受けているのだから、親に似るのは遺伝のせいなどではなく、もし子供を自由に育てることを許されるならば、望みどおりの人間にして見せると豪語したアメリカの有名な心理学者もいた。一方では、子供に大演奏家の夢を託して音楽の早期教育に熱中し、結局は失望を重ねることになった親は数知れない。教育はわれわれが理想とするような成果を生み出す万能の力を持つのだろうか。それとも個人にもともと備わっている能力を引き出す (erziehen) のが教育なのだろうか。

行動遺伝学 Behavior genetics または behavioral genetics という名前は、1960年に Fuller と Thompson がその著書で初めて使った名称であるが、学問としてのその歴史は、遺伝学の歴史と同じく、20世紀初頭にまで遡ることができる。実験遺伝学の資料であるショウジョウバエやマウスなどについての実験的行動遺伝学、以前は遺伝心理学 Erbpsychologie と呼ばれた人間の正常精神機能の研究、および精神障害や精神遅滞あるいは犯罪・非行などを研究対象とする遺伝精神医学 Erbpsychiatrie の3分野である。最近になって多大のエネルギーが注ぎ込まれて研究されているのは、そのうちの人間の正常精神機能に関する研究である。

Fuller と Thompson は、これらの3分野をまとめて行動遺伝学と呼ぶことを提唱し、これがアメリカを中心に現在も継承されている。本書もこのような立場に立っているが、

これらの3分野は対象が違うから、当然研究方法も異なり、複数の分野にまたがる研究を進めている人は寥々たるものである。唯一の専門学会である Behavior Genetics Association でも、現在は英語で psychiatric genetics と呼ばれている精神障害や精神遅滞の研究が取り上げられることは少ない。

著者の Plomin は、テキサス大学の大学院で心理学を学んだ人で、現在はペンシルヴェニア州立大学の教授であり、人間の正常な行動・精神機能についての行動遺伝学研究者である。本書ではこの専門以外の分野の記載もあるが、その部分が物足りないのはやむをえないところであろう。

Plomin が専門としている研究分野を狭い意味の人類行動遺伝学ということにすると、その研究はアメリカが主流である。ただし研究の中心課題は、数量的に表現された行動特性の遺伝率 heritability の推定に限定されていることが多い。

遺伝率というのは集団遺伝学の概念で、集団における特定の測定値の分布(分散)のうち、どの程度が遺伝による分散であることを示したものである。本書で遺伝率といっているのは、基礎遺伝学で表現型分散に対する遺伝分散の比と呼ばれている指標であるが、それはともかく、個人の性格なり行動なりの特徴が遺伝と環境によってどのように形づくられるかという疑問を持って本書を読むならば、失望することになるかもしれない。

本書は5章から構成されている。第1章の序論では行動遺伝学の目的、簡単な歴史が取り上げられている。第2章は遺伝の基礎知識の解説、第3章は量的遺伝学と実験的行動遺伝学の概説と研究方法、第4章では著者が専門にしている正常行動のほか精神障害や犯罪などの反社会的行動についての研究成果、第5章は環境に関する考察という構成である。記載は平易であり、訳文も読みやすい。訳者の安藤寿康氏は中堅の心理学者で、わが国では数少ない行動遺伝学の研究者である。共訳者の大木秀一氏は、医学とくに行動遺伝学では必須の双生児研究の研究者であって、両氏は本書の翻訳にはまさに適役といってよい。

本書の内容について二、三批判を加えるならば、重要な研究成果で取り上げられていないものがあることを指摘しなければならない。その中には見逃すことのできない研究が少なからずあって、それらは主としてアメリカ以外で行われたもので、このような傾向はアメリカの研究者にありがちな傾向である。さらに遺伝率に関する数字をいくら並べても、われわれが本当に知りたい個性はどのように形づくられるのかという疑問に答えるにはほど遠いという批判がある。行動遺伝学、とくに狭い意味の人類行動遺伝学は、まだよちよち歩きを始めたばかりの学問であるという認識が読者に伝わってこないのは残念である。この段階から、将来どのようにこの学問を進めたらよいかという見通しが与えられるならば、本書はさらに有益な入門書になるであろう。(1994年8月 井上英二)